

柳沼牡丹園とよばれるようになりました。

柳沼家は代々須賀川で、もめん糸やきぬ糸を売る商ばいで、糸八木屋といわれていました。源太郎はこの柳沼家の長男で、十五才のとき、東京の開成中学校に進学し、さらに東京の農科大学で勉強しました。大学を卒業して、家にもどった源太郎は、牡丹園の仕事に力を入れ家の商ばいは弟にゆずりました。

牡丹の花を深く愛した源太郎は、牡丹園に移り住み、牡丹とともに起きて、牡丹とともにねるといわれるほど、心をこめて、一生けん命育てました。

源太郎は、数千本もある牡丹に支柱（ささええる竹）（ささええる竹）を立てるのにも、根をいためないようにと、ぜんぶ一人でやりました。

また源太郎は、む中で牡丹を育てながら、禅（仏の教え）（仏の教え）の道に入り、禅の勉強をしました。先生がなくなると、別のおしろうさんを先生として、約二十年も修業をつづけました。

源太郎にとって、牡丹を育てる心も、禅の道を勉強する心もかわりありません